

令和7年度第1回春日井市いじめ・不登校対策協議会

1 開催日時

令和7年6月18日（水曜日） 午後3時から午後4時30分

2 開催場所

市役所9階 教育委員会室

3 出席者

委員	願興寺礼子、伊藤治彦、佐藤文彦、岩間周平、横井隆一、鈴木明子、河合亜樹、 内藤 昇、吉田啓介、伊藤 仁、坂田安男、水野敦夫、六浦さとみ
教育長	兒島 靖
事務局	森本邦博、前原 敦、梶田英男、石川和男、山崎俊介、三浦敬一郎
欠席者	山口 力

4 議題

- (1) 令和6年度いじめ・不登校対策協議会事業報告
令和7年度いじめ・不登校対策協議会事業計画
- (2) いじめ・不登校についての状況報告及び意見交換

5 議事内容

- (1) 令和6年度いじめ・不登校対策協議会事業報告
令和7年度いじめ・不登校対策協議会事業計画

【事務局】 資料に基づき説明

- (2) いじめ・不登校についての状況報告及び意見交換

【願興寺会長】 令和6年度は不登校者数が小学校では増加、中学校ではほぼ横ばいとなっている。春日井市では今年度より、小学校の不登校対策として、小学校3校で登校支援室を開設している。そこで、登校支援室の現状と、小学校の登校支援室の運営、そしてこれまでの様子について教えて欲しい。

【吉田委員】 中学校の登校支援室は、6月現在で市内全中学校合わせて170名が登録している。その中で週2、3日利用する生徒は、104名であった。昨年度は登録者数204名に対して週2、3日利用した生徒は110名であり、登録者数としては、やや減少している。例年年度末までに250名程に増える傾向にあり、既に1年生も利用していることから、これから利用する生徒が増えていくものと予想される。

【伊藤仁委員】 小学校の登校支援室については、原則3年生以上を対象に利用者を募っており、藤山台小学校、大手小学校、小野小学校の3校で開設している。まず、藤山台小学校については、3年生男子1名、4年生男子1名、6年生女子が3名で合計5名の児童が利用している。このうち、ほぼ毎日利用できている児童が2名、週3日の利用が2名、月に2、3日の利用が1名となっている。次に大手小学校について、4年生

男子が2名、4年生女子が1名、5年生男子が1名の合計4人の児童が利用している。ほぼ毎日全員が登校支援室を利用している。最後に小野小学校について、3年生女子が1名、6年生男子が1名、6年生女子が1名の合計3人が利用している。3人の内、ほぼ毎日利用できている児童が1名、週3、4日の利用が1名、月に3日程の利用が1名となっている。

小学校の登校支援室の運営については、コーディネーターを教頭、主幹教諭、校務主任が担い、学校規模、利用者のタイプに応じて運営している。次に児童の送迎については、小学校は原則、保護者対応となっている。保護者が迎えに来た際に、支援員と顔を合わせることができ、その日の様子など密な情報共有を行っている。そして、一部の学校では、既にコーディネーターによる保護者懇談を実施しており、積極的に保護者と連携している。次に、登校支援室に関わるための教員の空き時間の確保については、小学校の教員は、中学校の教員と比べて空き時間を確保することが難しいため、担任を始め、校長、教頭、心の教室相談員、スクールカウンセラー、通級指導員など、学校内外の職員が時間を作り、支援室に出入りしている。また、時間を有効活用するためにチャットを活用し、児童の動向をリアルタイムで共有している。最後に子ども達への支援について、ものづくりやタブレットの利用など、一人で過ごす時間と、子ども同士でカードゲームや趣味の話しなど複数で関わる時間を区別している。

【願興寺会長】 小学校と中学校で登校支援室内の様子や子どもたちの様子に違いがあれば教えて欲しい。

【伊藤仁委員】 小学校3校で登校支援室を開設した時期が違う。その中で早く準備ができた学校は、中学校で積み上げた経験をより活用できたが、遅れてしまった学校では、準備に時間がかけれなかったため、小学校の相談室を始めとした別室登校の児童が今までの別室登校の利用方法をそのままの形で利用することになり、児童も保護者も去年と何も変わらない状態で利用してしまっている。今はまだ託児所に似た面があるが、これからは小学校の登校支援室として、個の学びや対人、集団の学びを提供したいと考えている。

【吉田委員】 小学校は、中学校と違って担任が自分のクラスに入る時間が多いことから、様々な先生が登校支援室に入ることは難しい。コーディネーターの先生も誰に登校支援室に入ってもらうかは学校で迷うことになると思われる。また、小学生と中学生は指導や支援の方法が違うので、小学校に合った方法を今後検討していく必要がある。

【願興寺会長】 登校支援室と同様に不登校児童、生徒の居場所として大きな役割を果たしている教育支援センターあすなろの最近の状況について教えて欲しい。

【伊藤副会長】 私自身があすなろに勤務をして5年が経過するので、過去5年の状況を含めて報告する。この5年間で小学生の相談は約2.5倍に増加し、中学生は35%減少している。現在の利用状況は、中学生の利用が多い。中学生の相談、利用の減少は登校支援室の全校配備の影響が大きいと思われる。

あすなろの利用における最近の傾向として、見学相談から体験に至るケースが増加している。今までは体験まで繋がるケースは5割程度であったが、最近は7割程

度まで上がっている。不登校に至るきっかけに明確な理由はなく、教室全体の騒がしさや、人の多さ、人間関係の煩わしさなど、環境に適応できなかったことがきっかけで休むことがある。そこから休みが増え、学習が遅れることで、更に学校に行き辛くなってしまい、不登校になっていくケースも多い。最近では、あすなろの静かで穏やかな環境で勉強や生活を送りたいという気持ちの子どもも増えている。

あすなろを利用する子どもたちを見てみると、学校との繋がりが薄い子どもと、しっかりと繋がった子どもとがいることが分かる。学校の健康診断や個人懇談など、一度も学校と接触したことがなく、子どもも保護者も学校に行く必要がないと感じているケースがある一方、タブレット等を利用して子どもと繋がり、不登校であっても、子どもと学校の間を維持しているケースもある。そのため、一昨年より学校との繋がりを作ってもらうため、懇談で関係を作ってもらおうよう働きかけている。

学校復帰について、登校することが難しい子どもたちにとって、登校支援室も学校の一部であることから、学校に足を踏み入れるという点でハードルの高さを感じている。学校復帰については過去5年間で男子で3名、女子で7名となっており、計10名の子どもたちが学校に復帰している。

今年度の4月に小学校の登校支援室に通った児童がいるが、2週間ほど通ったものの、居づらかった記憶がフラッシュバックしてしまい、登校できなくなったケースがある。それまではあすなろに通えていたが、現在はあすなろにも通えなくなっており、学校復帰の難しさを感じている。

最後に、不登校相談は女子の方が多い。過去5年の相談でも60%以上が女子で直近3年間では88%となる。文部科学省の調査では、男子は女子と比較して学校に行けないことを気にする割合が少ない傾向にある。女子は本当は学校に行きたかったが、何らかの理由で行けなくなったというものが多いことから、女子は学習の支援に対するニーズが高く相談件数も多い。あすなろでも同様の状況が見られている。

【願興寺会長】 不登校対策の一つとして実施されている家庭教育コーディネーターの事業について、取組みを具体的に教えて欲しい。

【横井委員】 家庭教育コーディネーターとしての活動は大きく分けて二つある。一つはホームフレンド活動で、不登校児童生徒の自宅に、教育分野を目指す大学生のボランティアと共に訪問し、学生は本人の話し相手や遊び相手になり、コーディネーターは保護者の相談に乗る。昨年度は12名の児童生徒宅に訪問した。今年度は現時点で11名となっている。春日井市は他の市町村と比較し、ケースが多いことから、ボランティアの学生を一人増やし、3名の学生とともに対応している。学生1名につき、月2回、1日で多くても2名の対応となるため、学生1名で対応できるのは子ども4人となる。

現在学校に足が向きかけている児童が2名いる。1名はホームフレンド活動を続けて3年が経つ児童で、昨年5月中旬から毎日少しずつ登校できるようになってきている。もう1名は小学校の登校支援室を利用している児童で、4月から登校支援室の利用を開始し、当初は1週間に1時間のみの利用であった。そこから、給食や給食後の授業への参加と、少しずつ学校で過ごせる時間が増えている。どちら

も登校が安定次第、ホームフレンド活動を終了する見込みである。ただし、ボランティアの学生と遊ぶことが好きな子どもが多いことから登校が可能になり、ホームフレンド活動が終了することで、子どもの楽しみが減ってしまうことにも繋がる。そのため、子どもの心に寄り添いながら終結に向けて支援している。

もう一つの活動として、市内の小中学校を定期的に訪問し、不登校の状況について情報共有を行っている。小中学校の訪問以外にも、定期的に不登校対策ネットワーク会議を開催し、登校支援室担当の先生やあすなろ教室の先生、スクールソーシャルワーカーとで市内の不登校の問題について話し合っている。

【願興寺会長】

いじめ不登校相談室に寄せられる相談について、最近の傾向や特徴について教えて欲しい。

【内藤委員】

いじめ相談については今年度に入り小学生1名、中学生3名の計4人の子どもの保護者から相談を受けた。このうち、中学生のケースでは、小学校からのいじめが継続されているものがある。小規模校では、小学校での人間関係が中学校まで続いてしまう傾向が高いことから、中大規模校と比較していじめが継続してしまうことがある。一旦解決したからといって対応を終了するのではなく、継続的に様子を観察していくことが重要だと感じる。そして、小学校から中学校など、学校を跨いだ時は学校間の連携が弱くなり、支援が途切れてしまうことがあるため、進学タイミングではより一層注意が必要となってくる。

続いて不登校の相談については、今年度に入り、小学生7名、中学生10名の計17件の相談を受けた。17件の不登校の要因としては、自分自身のことが11件、家庭環境が2件、勉強に関わるものが2件、学校内の人間トラブルが2件であった。相談をされる保護者は学校に行くことが全てではないと多くの方が分かっている。しかし、特に中学生の保護者は、卒業後の進路や将来のことを考え、学校が全てではないと理解していても学校に行けないことに不安を抱えている方が多い。そのため、相談室は、不安を抱える保護者の思いに寄り添いながら、子ども達の支援のため、相談活動を続けている。

【願興寺会長】

小中学校の今のいじめ・不登校の状況について教えて欲しい。

【坂田委員】

全ての中学校ではないが、養護教諭が全学年を対象にストレスチェックを実施している。その中で怒りの項目が高い生徒や養護教諭が気になった生徒に対して直接面談を行っている。いじめについては、アンケートを実施しているが、学校で行うと犯人捜しになってしまい、被害者が更に攻撃を受けてしまう可能性があるため、アンケートは家庭で記入してもらい、封筒を使用し、書いた生徒を特定できないよう配慮している。また、いじめの被害者には、部活を頑張っていた生徒だったので、いじめに負けず、才能を活かすよう子どものいい面を引き出し、声掛けをしたことがある。

【水野委員】

小学校では、保育園や幼稚園とは違い、7～8時間を学校で過ごし、更に子どもの家を利用すると、親から離れて過ごす時間が長くなり、より子どものストレスが高くなってしまう。ストレスにより限界を迎えた児童が不登校になる傾向にあると感じる。また、ざわざわした空間が苦手であったり、学習について行けなかったり、

学校に何らかの行き辛さを抱える児童は、不登校に至る傾向が強い。不登校児童の中には発達特性を持った児童もいるため、保護者と学校で共に対応、対策を考えて行くことが重要だと考える。

最後にいじめ不登校対策部会については、現在、年間3回程研修を行っている。各校の生徒指導担当が参加しており、先生のスキルを高める重要な会議となっている。

【願興寺会長】 児童生徒にとって身近な相談室である保健室について状況を教えて欲しい。

【六浦委員】 保健室には毎日来室する児童がおり、話を聞いていくと生活や家庭の様子を打ち明けてくれるようになる。養護教諭としては、寄り添う姿勢を大切にしてお対応している。保健室で話をした後、必要に応じて心の教室やスクールカウンセラー、スクールソーシャルワーカー等に繋いでいる。

不登校については、小学校で不登校傾向であった児童が中学校に入り、登校支援室に定期的に登校出来るようになったことを報告してくれることがあった。登校支援室という安心できる場の重要性を感じた。

いじめについては子どもがいじめと感じた出来事については、職員全員で情報共有し、必要に応じて保護者とも連携しながら早期に対応している。また、高学年や中学生の間に SNS に関連しいじめやトラブルが起きていることから、アンテナを常に高くすることを心がけている。

【願興寺会長】 名古屋法務局の取組みといじめ相談に関する最近の状況について教えて欲しい。

【岩間委員】 子どもの人権に関する取組みとしては、人権教室などの啓発活動や、人権相談、子どもの人権 SOS ミニレターを行っている。子どもの人権 SOS ミニレターは、先生や保護者に相談できない悩みを的確に把握し、学校や関係機関と連携を図りながら、人権問題の早期発見、解決に当たることを目的とし、平成 18 年度から取り組んでいる。令和 5 年は全国で約 7500 件の相談が寄せられ、このうちの 26%である 2126 件がいじめに関するものであった。春日井市においては、令和 6 年度は計 43 通、複数回答もあるため、人数としては 30 人からミニレターが届いている。令和 5 年は 30 通であったことから、増加傾向にある。30 人の内訳は小学生が 28 人、中学生が 2 人で、性別は男子が 5 人、女子が 25 人となっており、女子小学生からの相談が多い。内容としては、友人関係が最も多く、次いで家庭問題、学校問題、いじめ、その他となっている。相談内容は原則秘密としているが、人権上重要なものについては、学校に情報提供を行っている。

【願興寺会長】 春日井市内における非行や補導の状況について教えて欲しい。

【佐藤委員】 春日井市内の少年補導の件数は増加しており、昨年は 1800 件以上であった。今年の状況としては、高校生の数も入ってしまうが、4、5 月で約 100 件であった。6 月になり更に増加しており、1 日で 20 件以上、補導事案が挙がっている。補導されると、基本的に警察から保護者に連絡をするが、電話に回答がない保護者もあり、これらの家庭は、家庭としての機能が失われていることも考えられる。これから夏休みに入ることで、非行が増えることを警察としては懸念している。

【願興寺会長】 保護者や PTA 役員の立場から見た学校の様子について教えて欲しい。

【鈴木委員】 知り合いの中学校の登校支援室支援員から登校支援室の状況について確認した。

その中で、早期に教室復帰できればいいが、ずるずると登校支援室を利用し続けている生徒もいるとのことであった。

子ども達の生活では、部活動の縮小により、勉強より運動が得意な子どもが、部活動の時間や規模、種類が縮小されたことで外への発散の場が失われていると感じる。家庭環境では保護者が子どもに無関心であったり、ひとり親であったりと様々な理由で子どもに時間をかけられず、子どもが取り残されてしまうことで、生活が乱れてしまう子どもがいる。行政や教育で全ての子どもたちを助けることは難しいが、全ての子どもを救うスタンスで子どもに目を向けていくことが重要だと感じる。

【河合委員】

以前、いじめによる不登校の相談をしようと思ったが、相談先が分からず困ったことがあった。担任には相談はできていたが、担任から上は、学年主任までしか届いておらず、教育委員会に相談をしたことで、教育委員会から中学校に連絡が入り、解決に至ったことがあった。その際、校長先生は、いじめについて把握されていなかった。保護者は不登校の相談は「恥ずかしい」「先生に申し訳ない」と言った思いで、相談に行けなくなることがある。どこにも相談できなくなり、子どもと一緒に抱え込み苦しんでいる保護者が多くいると思われるので、学校には保護者が相談しやすくなるよう変えて行って欲しい。

【願興寺会長】

春日井の子ども達が幸せに生き活きと毎日を送れるよう様々な立場で今後も協力を賜りたい。

上記のとおり、令和7年度第1回春日井市いじめ・不登校対策協議会の経過及びその結果を明確にするために、この議事録を作成し、会長及び会長が指名する者が署名する。

令和7年 9月 26日

春日井市いじめ・不登校対策協議会

会長 願興寺 礼子

副会長 伊藤 治彦